

伴侶の死

加藤恭子

中公文庫



中公文庫

はんりよ し
伴侶の死

定価はカバーに表示してあります。

1997年9月3日印刷

1997年9月18日発行

著者 かとうきょうこ
加藤 恭子

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋 2-8-7 振替 00120-4-34

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA, INC. / Kyoko Kato

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202939-2 C1195

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

伴 侶 の 死

加 藤 恭 子



中央公論社

目次

衝 撃

11

夫は、どんな人だったのか？

27

過去へ

33

子供時代

34

中学時代

49

高等学校時代

56

大学時代

78

出会い

85

結婚

86

成蹊高校教師の頃

95

渡米

125

パークレイでのアルバイト生活

126

セント・ルイスの頃

150

ボルティモアの頃

157

帰国

165

無理だった別居生活

166

再びアメリカへ

181

平穩だったアムハーストの頃

182

再び帰国

197

三菱化成生命科学研究所へ

198

どんな研究者だったか

208

どんな人間だったか

231

兆
し

247

気づかなかった前兆

248

なぜ気づけなかったのか

257

最期の三週間

せめて……

最期の別れ

死の周辺

浮遊感覚の中で

死の瞬間

旅の終りに

花みずきの咲く土地へ

366

365

343

314

313

303

282

281

あとがき

383

To My Readers

389

文庫版あとがき

391

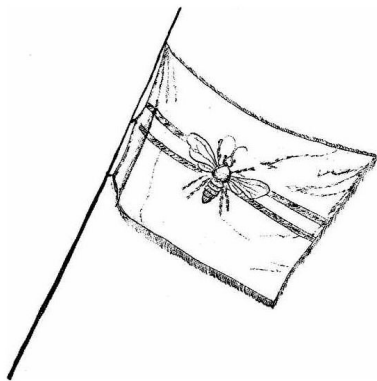
夫と妻のあり方と「死」

澤地久枝

397

扉カット 恒吉僚子

伴侶の死



突然の死

「大変です。私の主人が癌で死にそうなんです。どうかしていただけないでしょうか!？」

通勤途中の新宿駅。総武線や小田急線のホームや通路ですれ違ったり、私を追いこして行く人たちに声をかけ、すがりつきたいような衝動に私は駆られた。

東京で育った私は、都内の駅の通学通勤の雑踏に何十年巻き込まれてきたかわからない。周囲の人間たちとは、老人や子供を押ししたりしないように最小限の礼節は守ろうとはしてきたものの、いわば無縁の人たち、機械的に忙しく動き流れていく存在にすぎなかった。

その人たちさえもが、四月十一日を境に、一変した。

昭和六十三年四月十一日の六時、相模原市の北里大学東病院を訪れた私は、その月の二日から精密検査のために入院していた夫、淑裕の病気が、実は食道癌であったことを告げ

られたのだった。手術はすでに不可能。

「何が起こるか予測はつかないが、長くても、半年……」

と、病院の三重野寛喜先生は言われた。

その翌日から、私が勤務している大学の新学年の講義が始まった。

昭和四十七年に帰国して以来の十数年間、四月というのは忙しくはあるけれど、心躍る月であった。難しい入試をやっと突破して入学してきた新入生たちが溢れるキャンパスは、どことなく活気に満ちていた。だが、その十数年間でもっとも困難な新学年が私を待っていた。ようとは、三ヶ月前の昭和六十三年の正月という時点でも、私は思ってもみなかった。

四谷の土手では、やや遅咲きの桜がうすいピンクの雲をたなびかせていた。おそらくは江戸時代以来、年ごとの繰返し、そしてこれからもつづくであろう自然の営みであった。

（でも、彼にとっては、“来年の桜”というものはありえないのだ。）

と思った瞬間、ピンクはすーっと白く、灰色に脱色してしまった。

“半年”……あの時にはひどく差し迫って聞えたその言葉でさえ、今となっては何とゆるやかな、夢のように手の届かない響きを帯びているのだろう。

淑裕は、その日から十二日しか生きてはいなかった。昭和六十三年四月二十三日、午後十一時四十分死去。

アメリカへ留学していた娘の僚子は、十七日に急遽帰国。その六日後のことであった。四月二十五日（月）付の各新聞は、彼の死を報じてくれた。『朝日新聞』を手にし、

加藤 淑裕氏（かとう・よしひろ）三菱化成生命科学研究所前副所長、日本発生生物学会前会長）二十三日午後十一時四十分、食道がんのため、神奈川県相模原市の北里大学東病院で死去、六十三歳。葬儀・告別式は二十六日正午から相模原市古淵の紫雲殿で。喪主は妻恭子（きょうこ）さん。

哺乳（ほにゅう）動物を使った発生生物学実験研究の日本での草分けの一人。細胞レベル、遺伝子レベルの実験を進めてきた。

と読んで、私にはそれが直接自分とはかわり合えないような、浮遊感覚の中にいた。

“急死”に近い死に方をした淑裕の死は、家族だけでなく、あちこちの関係者たちに衝撃を与えた。三菱化成生命科学研究所の副所長を辞し、特別顧問となってからは、研究に専念するつもりで、共同研究の計画をいくつもたてていた。書きかけの論文、やりかけのリサーチ、学会の役員、評議員などの役職、山形市に設立した発生・生殖生物学研究所の名

誉所長、オリンパス光学工業の生命科学担当の研究参与など、すべてを途中で放り出してしまったことになる。

（何が何だか、わからない。）

あまりにも突然の別離であった。

遅すぎた発見

彼の健康に対して、不安がまったくなかったわけではない。お酒にタバコ、野菜や果物嫌い和不摂生なうえに、胃潰瘍の持病があった。極端なお医者嫌いで、定期検診の類は逃げてしまう。だが一方では、病氣と名のつく病氣にかかったことはないし、頑健そのものでもあった。その体力を、本人も私たちも過信していたのかもしれない。死ぬ一ヶ月前には、京都の学会で座長をつとめていた。同じ研究所の同僚の一人が淑裕の体の異常に気づいたのは、その時がはじめてだったという。

「末期癌の患者が、それだけの活躍ができるもののですか？」

と多くの方に驚かれたが、「四月十一日」という時点までは、少なくとも私は癌など疑って見たこともなかった。

二年ぐらい前から、さしも頑強だった体力に衰えがきたことは感じていた。何となく疲

れやすくなり、老けてきた。

アメリカ留学から休暇で帰国した娘が、

「パパ、老けたみたい」

と、私にそつと囁いたことがあったが、

「そうなのね。でも、六十を過ぎたから……」

と、年のせいにして答え、娘も納得してしまっていた。あの時に、病気を疑うべきであったのだ。

昭和六十三年の正月も、私たちは弟たちの家族と一緒に、いつも通りに祝った。眼の前には義妹たち心づくしのごちそうが並んでいたが、お酒ばかり飲む淑裕は、そちらにはあまり手をつけない。だが、それはいつものことでもあったし、気にならなかった。

体調がおかしいことに私が気づいたのは、二月に入ってからだった。配偶者が老け込み始めた心淋しさを口に出せないでいた私は、もしかしたらそれは体のせいかもしれないと、この時になって急に気づき、ハッとしたのだった。

「お医者様へ行って下さい」

が口ぐせになり、毎日彼をいらさせた。委員会、学会など、彼のカレンダーはびっしりと埋っており、時間の余裕がない。それにいつもの胃潰瘍だから、というのが彼の口